在宅医療における臨床検査技師への期待

谷水　正人　　国立病院機構　四国がんセンター
第 4 回日本在宅医療連合学会大会長

今の世を一言で表すとすれば、「騒然」という言葉でしょう。騒然となるきっかけはコロナ禍、もうひとつはロシア・ウクライナ戦争です。

コロナ禍の影響で第一には、人と人の接触が減りました。第二には、ひとが動かなくても世の中が動くようになりました。人々の意思疎通は悪化しましたが、テレビ会議などで人と人の距離は短くなったとも言えます。社会問題を顕在化させ、ワークスタイルを変え、騒然と社会の変化を加速させました。

ロシア・ウクライナ戦争で、戦争の形は全く変わりました。陸上最強だった戦車がゴミになり、海の駆逐艦も、空の戦闘機も一度狙われたらおしまいです。見えない遠隔からミサイルや榴弾砲で相手を潰し合うのが戦争で、接近戦では誘導弾やドローンが最強です。旧態然たる軍備拡充にいそしんでいた国家は頬を打たれ、大戦前の状況に世の中、騒然です。

2 つの出来事は世の中を騒然とさせていますが、いずれこうなることには予感がありました。この 2 つの出来事に「時代の変化を加速した」という感想を持つ人が多いと思います。いずれはそうなるだろうと多くの人が朧げながら感じていた証拠です。

前置きが長くなってしまいましたが、医療の世界も今後大きく変わります。朧げながら見えている未来もあります。私が本日伝えたいのはそのことです。

科学・文明の進歩と限りある人体の間（はざま）で、現在の医療の目標は「病の克服」から「病との共存」に変わってきています。高齢者医療が医療の中心となり、臨床としての医療は、最新技術を駆使する「病院医療」が頂点ではなくなり、「地域の中の医療」に中心が移っています。入院医療、外来医療に第 3 の場として在宅医療が加わり、さらには、医療・介護・福祉の一体化が謳われ、医療で完結する範囲は縮小しています。他方、臨床検査部門は病院医療の中の機能分化として生まれ、病院医療の一角です。臨床検査が病院の中でこの先も重要な役割を担い続けることは間違いありませんが、病院の中だけに留まっていてこの先、済むかは疑問です。在宅医療の分野でも臨床検査技師が専門性を活かしつつ、多職種と共同し、社会のニーズを的確に捉え、応え、新しい役割の担い手として社会に提案していくことが求められています。病院から在宅医療に参入するところも増えてきています。

日本在宅医療連合学会では、在宅における臨床検査技術の活用拡大では、まだ明快な提言は出せていません。臨床検査の立場と在宅医療の立場の歩み寄りや共同の取り組みが必要です。あるいは在宅医療連合学会の雰囲気に触れて、在宅医療の未来を共に感じていただくことも意義があるのではないと思っています。障害となる制度上の問題解決には日本在宅医療連合学会が役に立てることもあると思います。

皆様の挑戦したいアイデアや提案・活動実践をぜひ教えてください。

夢は、ある時までは戯言だと蔑まれ笑われ、ある時からは猛然と反発を喰らい、そしてあるとき突然、さも当然であったかのように受け入れられます。「在宅医療」そのものがそうでした。これからの未来に皆様と一緒に取り組めることができれば嬉しく思います。

谷水正人（たにみずまさひと）

昭和 57 年 03 月　岡山大学医学部卒業､同 04 月岡山大学医学部消化器肝臓内科学教室入局、岡山済生会総合病院、雲南市立病院、岡山大学病院勤務を経て、平成 05 年 03 月から国立病院四国がんセンター内科勤務、平成 21 年 04 月国立病院機構四国がんセンター統括診療部長、平成 25 年 04 月副院長を経て平成 29 年 04 月から院長、令和 4 年 3 月から同名誉院長。令和 3 年 1 月現在日本在宅医療連合学会副代表、松山市医師会副会長、愛媛県がん対策推進協議会委員、愛媛県在宅緩和ケア推進協議会委員、愛媛大学医学部臨床教授などを併任